12　環　　境

総合的な学習「環境」領域

1．基本的な考え方

(1)　総合的な学習「環境」の必要性

人口の増加や豊かさの追求に伴う生産・消費活動の拡大は，人間の地球環境に及ぼす影響を多大なものにしてきた。このまま，地球の資源やエネルギーの消費と，廃棄物の排出を続けたとすれば，その付けは必ず我々自身に跳ね返り，その生存をも危うくすることになる。生活水準の向上と，環境保全のバランスを図るためには，地球市民としてグローバルな視点から持続可能な発展を模索しながら，我々一人ひとりが自分の生活に根ざした行動を起こしていかなければならない。そのためには，環境に対する豊かな感性や確固たる見識をもった人間づくりが大切になってくる。環境問題の解決には，意識の改革が必要である。対象を素直に受け入れ，科学的にとらえる力，物事を判断し行動する力を培うことなどが大きなねらいとなってくる。

(2)　本校における総合的な学習「環境」の特徴

本校では，総合的な学習を結果重視の学習ではなく過程重視の学習と考え，「環境」は,「自分と環境とのかかわりを見据える領域」として設定している。身近な環境や動植物への慈しみから始まり，地球規模の環境問題までを学年の発達段階に応じて活動範囲を広げ，環境を自分とのかかわりの中で見つめ直していく学習活動を展開しようと試みるものである。したがって，子どもたちが主体的に体験活動ができるように考えて教育課程は編成されており，知的理解を中心とした環境教育とは一線を画すものとなっている。これまで知的理解を中心とした環境に関わる多くの実践に取り組んできたが，それらは必ずしも環境に対して行動を起こすことに結びついてきているといえるものではなかった。行動を起こす原動力を「その環境が好きになること」と捉え直し，その環境が好きになるような体験活動を土台として課題を追究する学習を基本としている。[1)]

(3)　教科・領域との関連

最近では，多くの教科で環境や環境問題を扱っている。例えば生活科では，自然の観察や動植物の飼育・栽培などの体験をとおして，自然のすばらしさや生命の尊さを感じとっていく。社会科では人間の活動を中心として，理科では，自然事象を中心として，自然と人間とのかかわりについて学習している。家庭科では，家庭生活の衣・食・住環境を総合的に学び，体育科では，健康な生活の維持・増進のための環境とのかかわりの学習がある。その他の教科，道徳，特別活動においてもそれぞれ環境に関する学習が豊富に用意されている。

本校の総合的な学習「環境」は，それぞれの教科・領域のもつ特性や本来のねらいと関連させながら，また，総合的な学習の他の領域などと関連させながら，環境にかかわる体験を重視した学習として教科・領域とは独立して展開していくものである。

(4)　学習材

子どもの身近な環境（自然・社会）として学習の対象となるものは，動植物，空気，水，ごみ，リサイクル，公害，開発，自然保護，治山治水，食糧，……と多種多様な事象が考えられる。

その中でも，本校では次のようなものが大切であると考えた。

- 子どもにとって身近な環境であり，校外での体験学習が比較的容易なもの。
  （何気なく見ていたもの　→　見つめ直すきっかけ）
- 年間を通していつでも学習に成りえるもの。

（子どもの関心意欲がいつでも満たされる）

・ その環境のもつ「よさ」と「問題点」が子どもにとってとらえやすいもの。
（その子なりの関わり方，考え方が広がりやすく深まりやすい）

・ 広がりや発展性があると考えられるもの。
（「自分タイム」などへの意欲が継続できる）

以上のような条件を満たすものとして，「水」をテーマに学年や個性に応じた多様な課題がもてるような体験活動を設定した。

◇ 猿猴川 → 本校のすぐ隣を流れる川で，行きたい時にいつでも行ける距離にあり，川に住む生物と川の水の汚れとをあわせもつものである。

◇ 元宇品 → 少し離れた所ではあるが，山あり，海あり，港ありと狭い場所にいろいろな要素（自然・人工）が凝縮されている。

◇ 太田川・瀬戸内海 → 猿猴川や元宇品と同様である。

子どもたちにとって，新たな発見と問題意識がきっと期待できるものと考える。これらの学習が6年生の「水の旅」へと発展的につながっていくものである。

2．ねらい

自然とふれあったり，身のまわりの環境を調べたりする活動を通して，自然のよさやそれらを取りまく問題点に気づき，環境保全に向けて進んで行動する態度を育てる。

ねらい	感じる	調べる	行動する
	・自分を取り巻く環境に進んでかかわることができる。 ・体験活動を通して，自然（喜び，かわいらしさ，楽しさ）を感じることができる。	・めあてを持って，身のまわりの環境について調べることができる。 ・自然の変化やサイクルを豊かに感じることができる。	・様々な角度から環境を見つめ，環境保全に向けて進んで行動することができる。
低学年	◎	○	
中学年	◎	◎	○
高学年	◎	◎	◎

◎＝特に大切にしたい項目

3．成果と課題

低・中学年においては直接体験の場を設定しており，実感のもてる体験として魅力的な活動をくむことができた。反面，高学年においては，直接体験の場を「環境」独自の活動として設定していない。そのために低・中学年の活動と高学年の活動の間にギャップが見られた。宿泊学習に関連をより強めた学習を取り入れていくか，独自の活動を組むか検討が必要だと感じられた。また，体験の積み重ねで見通しや計画性をもつようになり，目的意識をもって活動するようになってきている。しかし，追究活動が様々なために，すべての追究活動を保障していくのは難しいし，自分で選択すれば必ずうまくいくというものでもなく，どのように支援すればよいか今後の課題となっている。

参考文献

1）佐島群巳，『環境マインドを育てる環境教育』教育出版，1997.